令和５年度（2023 年度）
厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策政策研究事業)
（総合）分担研究報告書

拠点病院集中型の HIV 診療から、地域分散型の HIV 患者の医療・介護体制の構築
東葛地域の HIV 診療に関する研究

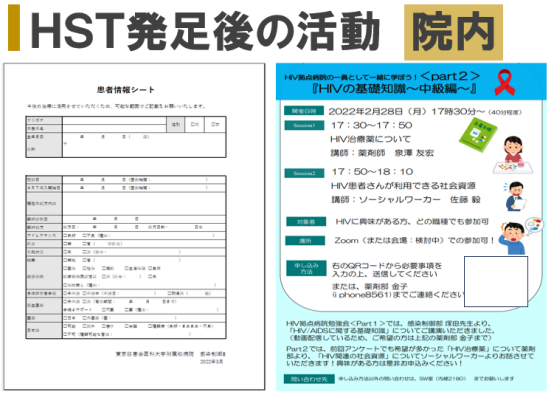
研究分担者　塚田　弘樹　東京慈恵会医科大学附属柏病院
感染制御部　診療部長（教授）

研究要旨
当院に HIV 診療を円滑にする多職種チームを立ち上げ、行政機関・地域関連機関との情報共有する機会を設けた。調剤薬局との薬薬連携会議も開催した。東葛地区の４拠点病院との顔が見える関係者会議を開催でき、各施設での問題点を共有し、解決策を検討する機会を得た。各拠点病院すべてで患者数が増加しており、特に東葛南部の順天堂浦安病院においては厳しい状況であることが分かった。同地域の拠点病院を増やすことは喫緊の課題であることが明らかになり、行政に提言していくべきである。患者の高齢化に伴う地域行政機関・訪問診療・介護施設など関連機関との連携が今後の大きな課題であることも分かった。

A．研究目的
患者が急増している東葛地域特有の HIV 診療体制における問題点を明らかにして地域行政機関への提言を目指すとともに協力体制の構築を目指す。

B．研究方法
各拠点病院において HIV 診療チームを構築し、増加する患者のスムーズな受け入れを図るとともに、職員や行政機関、地域医療支援機関、調剤薬局薬剤師などへの啓蒙の機会を増やし、４拠点病院の症例検討会を立ち上げ、情報共有の基盤とする。
（倫理面への配慮）
拠点病院医療従事者を対象にした診療体制に対する調査を基にし、行政機関などへの提言を目指す研究なので倫理面の問題はなかった。

C．研究結果
１年目に、当院において、HIV とともに生きる人たちを支援するチーム（HST：People Living with HIV patient Support Team）を立ち上げ、院内組織図に位置付けた。HIV 診療における各部署の担当者と役割を明確化した。診療部・看護部・薬剤部・医療連携部署との院内連携を図り、月に１度以上の会議・症例報告を行う他、患者情報シートを作成して情報共有のデータベースとし、院内職員向け勉強会を開催して拠点病院であることを再認知してもらう機会とした。また、初診患者をスムーズに診療するため受診時のフローチャートを作成した。



２年目には、情報交換を兼ねた調剤薬局との薬薬連携勉強会の開催、柏市訪問看護連携会への参加、患者、他機関向けに冊子を発行、院外関係機関に参加を求め、事例検討会の開催、など行政機関・訪問診療・介護関係機関との連携を模索した。

HST発足後の活動 院外

01 薬薬連携勉強会の開催

02 柏市訪問看護連携会への参加

03 患者さん、他機関向けに**冊子**を発行

04 事例検討会の開催

3年目には、東葛 4 病院医療従事者を集めた「第 1 回エイズ診療拠点病院「顔の見える症例検討会議」を開催できた。新松戸中央総合病院から施設入所事例の紹介があった。2017 年からディサービス/訪問を含む入所実績がある。断られた施設の受け入れ困難理由としては、医療行為が多い、全身状態不良・または生活保護受給等の社会背景等複合的な理由を挙げていた。いずれも経験がないことをベースとした感覚に過ぎない理由と考えられる。「HIV 陽性」という理由で受け入れが不可、との回答は表面的には無かった。当院からはチームで取り組む高齢 HIV 陽性夫婦の事例を発表した。地域連携が必要と考えるきっかけになった症例で、その後柏市役所・柏市在宅介護協議会に参加し、HIV 感染症患者の介護サービス利用の現状を共有し、受け入れ体制構築の基盤とした。ケアマネージャーや訪問看護ステーション事業所との事例検討会も行った。東葛北部感染対策地域支援ネットワークで開催した高齢者施設向けの研修会で実施したアンケート調査によると、看護職、介護職ともに U=U 認知度は 1/4 に過ぎず、HIV 患者を受け入れて欲しくないと回答した割合が半数おり、研修経験や受け入れに関する話し合いももほとんどないと答えていた。東葛病院の「物質依存(薬物)のある PLWH への介入-臨床心理士の関わりの中で変わる患者の行動」では、患者さんに心理士が介入することのメリットとして、HIV 感染やセクシャリティーについて分っている相手に相談が出来ることや、日常のちょっとした報告をきっかけにより適応的なストレス対処能力の獲得や向上に向けて働きかけることができ、HIV 治療を継続するための生活や心理状態の安定化へ寄与していける意義が語られた。順天堂浦安病院からは東葛南部の診療可能病院が一減して、同院への患者増加がもたらされ深刻な問題があることが報告された。また、コロナ禍のなか、いきなりエイズ症例も増えており、治療に難渋した HIV 合併播種性 MAC 症事例が提示された。4 病院ともに患者増が著しい。

D．考察

患者の高齢化に伴い、都内通院者の回帰が進むと考える。4 拠点病院における診療チームを充実させて都内からの回帰患者の受け皿を拡大して準備する必要がある。医療主体の生活から地域主体の生活になることから、介護など含めた地域行政機関・関連機関との支援体制を構築していく必要もある。東葛病院以外の 3 病院は精神科があるにもかかわらず臨床心理士のチームへの参加が得られておらず、今後の課題である。

E．結論

患者の ADL 低下等により通院困難となった際の、代理意思決定場面等におけるプライバシーの配慮、受診先、老々介護、介護サービス事業者の受け入れ体制が不透明であることが分かった。

行政機関・訪問診療・介護施設など関連機関との情報共有・連携を早急に整える必要があることも明らかになった。東葛南部は喫緊に拠点病院の追加が必要であることが分かった。

F．研究発表

1. 論文発表

① 泉澤友宏、塚田弘樹 他 Clostridioides diffcille 感染症における metronidazole の有効性の検証 日化療会誌 70 (2)：210-216, 2022

② Imamura Y, Miyazaki T, Tsukada H et al. Prospective multicenter survey for nursing and healthcare-associated pneumonia in Japan. 2022 J Infect Chemother. 28(8):1125-1130.

③ 塚田弘樹・肺炎をめぐるトピックス・基礎から臨床まで～院内肺炎/医療介護関連肺炎のマネージメント・呼吸器内科、2021；39：471-475

④ 塚田弘樹・今日の治療指針第 12 版 7-3-26)「膿胸」東京 2022 342 医学書院

⑤　塚田　弘樹･内科學　2022年版 66巻 「放線菌症・ノカルジア症」東京　2022 1-326 朝倉書店

2.　学会発表

口頭発表

①　泉澤友宏、金子知由、堀野哲也、塚田弘樹
第70回日本化学療法学会総会 2022年6月
Clostridium difficille 感染症における metronidazol
の有効性の検証

②　塚田弘樹
第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会
第69回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会　教育セミナー 3　2022年10月
With コロナ時代の呼吸器感染症治療を再考する「～キノロン系抗菌薬の適切な選択を含めて

③塚田弘樹
第97回日本感染症学会総会・学術講演会
第71回日本化学療法学会学術集会
合同学会教育セミナー13
肺炎診療ガイドラインはどう変わるか～院内肺炎
を中心に～

④塚田弘樹
第93回　日本感染症学会西日本地方会学術会
第71回　日本化学療法学会西日本支部総会
共催セミナー 8
AMR対策を踏まえたレスピラトリーキノロンの適性使用を考える

G．知的所有権の取得状況

1. 特許取得:なし
2. 実用新案登録:なし
3. その他:なし